家庭養護婦派遣事業推進の背景思想へのアプローチ

－上田市社会福祉協議会事務局長時代の竹内吉正を中心に－

○　中京大学　　中嶌　洋（005048）

キーワード：家庭養護婦派遣事業，竹内吉正，人の和

１．研 究 目 的

日本初の組織的なホームヘルプ制度である家庭養護婦派遣事業創設の背景に，原崎秀司による欧米社会福祉視察研修（1953年9月～1954年5月）があったことは知られているが（森 1972:31;1974:3;竹内 1974:51-2;中嶌 2011:28-39;2013a:16-28 など），その一方，長野県上田市を中心に事業拡大していった経緯も見逃せず，この一端を論じた竹内（1974:51-69；1991:14-29）は貴重である．論者の竹内吉正（1921.1.15-2008.12.14，旧姓，花里，以下，竹内）は，在宅介護福祉の仕組みが十分に普及していなかった1955（昭和30）年7月から1961（昭和36）年3月において，同市社会福祉協議会（以下，同市社協）初代事務局長として同事業の構築に携わり，その展開に少なからぬ影響を与えた当事者である．しかしながら，竹内が同市社協事務局長在任中，ホームヘルプ事業の組織化に果たし得た役割や，彼の職務の背後にあった思想・熟考などが，上村（1997:247-57），山田（2005:178-98），荏原（2008:1-11）などでもこれまで十分に詳解されていない．

また，「ホームヘルプ制度の沿革・現状とその展望――長野県の場合を中心に」（『老人福祉』第46号，1974年）と題する論稿の冒頭で，「……豊富な資料に記憶をたどりながら綴ってみたい．」と竹内（1974:51）は述べるが，それは同事業創始から18年後に書かれたものであるため，誤認や記憶違いなど，記述内容への時間的懸隔の影響が懸念される．同様に，竹内本人にインタビュー調査を行った荏原（2008:1-11）では，本人の証言とはいえ，入院中の85歳（当時）の竹内の証言に依拠した研究となっており，適切かつ適時的な研究とは言い難い．歴史研究では，第一次史料に基づく史実の掘り起こしと多角的観点から適時的に検証することが重要であり，こうした地道な検討が歴史的事象から学ぶ意味や意義を示唆することになろう．

２．研究の視点および方法

上記より，家庭養護婦派遣事業の推進の背後にあった関係者の意図や連携のあり方，さらには竹内思想の究明については未着手の状態にあるといえ，同市社協事務局を取り仕切った竹内における職務及び日常生活をはじめ，彼の具体的な構想や課題認識の明確化なしには，家庭養護婦派遣事業の推進を思想的根拠に基づき語れないとするのが本稿の視点である．研究方法としては，残存する11本の竹内の論稿を参照しつつも，彼直筆の3冊の日誌〔『NOTE BOOK 花里吉正』(1954.7-1957.5,以下,日誌Ⅰ),『日記　吉正記』(1959.6-1960.10,以下，日誌Ⅱ),『Day and Day 竹内吉正』（1960.10-1962.12，以下，日誌Ⅲ)〕及び『昭和

三十年　議事録』(上田市社協蔵) など，第一次史料を主に用いる．加えて，筆者作成の「竹内吉正の年表」(1886 年 1 月 27 日～2009 年 6 月 24 日) を参照した．

３．倫理的配慮

倫理的配慮としては，竹内関連史料に関し，竹内の実兄の花里吉見氏から 2009 (平成 21) 年 10 月 3 日に日誌の使用許可を得た．次いで，上田市社協関連史料については，2014 (平成 26) 年 8 月 18 日及び 2018 (平成 30) 年 11 月 19 日に宮之上孝司氏 (同市社協常務理事) から，使用許可を得た．加えて，筆者の所属校の研究倫理審査委員会の承認を得た．

４．研 究 結 果

竹内直筆の日誌の記述を基に，家庭養護婦派遣事業の組織化の推進の背景要因として，同市社協事務局長時代の竹内の職務内容と思想展開を検討した．失職中の竹内にとって，長期療養からの復帰は容易ではなかったが，そうした窮地においてこそ，礼拝や信仰を怠らず，切実に祈りの道を求め，時には地元の有力者の横内浄音に助言を求め，諭されたりした．「最善の努力を畫し唯々クリスチャンとして御名をけがすこと無き様一途に畫す．」と記した竹内にとって (日誌Ⅰ：1955 年 7 月 16 日)，同市社協事務局長というポストは人生の再起を賭けた大舞台であり，こうした一途な姿勢から，市社協の実績不足の要因や改善点の一つとして，「人の和」の欠如を憂慮し，人格を磨き，人の道を求めようとした．

竹内日誌を注視すると，彼が社協の前途を悲観し，人の和を重視したこと，旧厚生省や各自治体などの視察応対や，県内外各地で講演を重ね，人々の理解を促したこと，家庭養護婦や未亡人のラジオ出演を促し，事業の PR をしたこと，市社協事務局長時代から一貫して新生活建設運動を推進していたことなどが見えてくる．孤高に研究する必要性や学究を重んじた竹内は，目前の課題に拘泥し過ぎず，地域性や連帯性にも着目し，社会福祉事業の推進に寄与しようとしたことが日誌の記述から跡付けられた．

5. 考 察

竹内の場合，社会福祉の事業・制度の推進を考慮した際，それを一部の関係者のものとせず，多くの人々の参加意識を高めることを求め，家庭養護婦派遣事業などの新規事業の周知のために，運営研究集会の開催や視察団への応対のほか，各地への講演活動を精力的に行った．加えて，同事業の周知徹底のために，家庭養護婦や未亡人らのラジオ出演を後押しし，メディアを駆使することにも余念がなかった．そこには援助をする人とされる人の双方の関係性を視野に入れた構想があり，利用者開拓や事業推進においては，そのどちらもが必要であるとの認識があった．理想と限界が存在する世の中において，矛盾や浪費を生み出す要因に組織が関わり、拡大することを危惧し，その変革の道のりを拓くための研究や勉強の必要性を，竹内は人一倍感得していた．視察団への応対や各地での現場視察・講演などにより，伝える側と伝えられる側の双方の経験を自ら積みながら，事業・制度を推し進めていた実態を，竹内直筆の日誌という第一次史料を基に跡付けた．竹内のとり組みが，家庭養護婦派遣事業の進展に留まるものではなかったことに留意する必要がある．